

帰る

毎年、その一年間の世相を表す言葉というものが選ばれますが、昨年（平成14年）は「帰」という漢字が選ばれました。

これは申すまでもなく、北朝鮮に拉致されていた方々（五名）が二十五年ぶりに日本に帰ってこられたという出来事によるものです。

まことに痛ましい事件で、その解決までにはまだまだ紆余曲折があろうと思いますが、国としてこれまでの失態を取り戻すべく、毅然とした外交姿勢を貫き通してほしいと望まざるにはおれません。

拉致被害者の方々の様子を見ていますと、帰国当初の硬い表情が日を追うごとに和らいでいくのがよくわかります。これを見ていて私は、人間にとって「帰るところ」があるということは本当に大きな力を与えてくれるものだなと、改めて感じました。

拉致被害者のご家族の方が「息子が行方不明になってから、一度も家の鍵をかけたことがなかった」と語っていましたが、帰る者にとってこれほど心強いことはありません。帰る所があり、待っていてくれる人がいる、これが私たちに生きる希望と勇気を与えてくれるのです。

ところで、昔から私たちの人生はよく旅にたとえられます。

旅（旅行）といえば、家族旅行、修学旅行、新婚旅行、観光旅行等と色々ありますが、その旅に共通していることは、どんな旅でも最後は、必ず帰って来るということです。言い換えますと、帰るところがあるから私たちは安心して旅を楽しむことが出来るのです。

帰るところのない旅は、それは「放浪」です。

放浪は、いつどこで泊まる宿があるのやら、いつどこで食事にありつけるのやらと、不安と心配でのんびりと旅も続けられないと思います。

「人生の旅」もそれと同じことです。

帰るところが明らかになってはじめて心安らかに旅ができるのです。

果たして私たちは、この「人生の旅」に帰るところを持っているでしょうか。

親鸞聖人はその帰るべきところを「浄土」に見いだされました。

ところが、その肝心な浄土が私たち凡夫の目では見ることはできません。そこで私たちは「そんなあるやらないやら分からんものが何で大事なんや。それよりこの世は金じゃ、仕事じゃ」と言うのです。

もちろん「人生の旅」は厳しいですから、お金も仕事もなくてはなりません。大変、大事なものです。

しかし、いくらお金を儲けても仕事に成功しても、私たちの欲（貪欲）には際限がありませんから、必ずまたそこから更なる欲が出てきます。

その結果、どこまでいっても「これで満足」という日暮にはならないのです。

そうすると、「このままで一生終わってもいいのか。

この世に生まれた本当の目的は何なんだ」という疑問が生まれてきます。

これこそ人間のもっとも深い部分にある「いのち」が求めているものです。

そして、このことが解決されない限り、私たちの「いのち」は決して満足しません。

その疑問に答えて下さるものが「南無阿弥陀仏」なのです。

南無阿弥陀仏は、「あなたの人生の旅の目的は浄土に帰ることですよ。何も心配ありません。精一杯、力一杯この人生を生き抜きなさい」という阿弥陀さまのメッセージです。

しかも、もっと大事なことは、その浄土は、死んでから先の話ではなく、生きている今も私を支えているということです。

浄土のことを無為涅槃界、真如、法性などとも言いますが、それは「あらゆるいのちを生かし続けようとする用き」そのものを言っているのです。

その用きは、私たちが息をしている、心臓が動いているということを考えれば分かることです。

息をさせているもの、心臓を動かしているもの、それが「用き」なのです。それは私たちのお思いをを超えた用きです。

その用きを頂いていることを「おかげさま」というのです。それは、目には見えないけれども、私を支えているもの（浄土の用き）への感謝の言葉です。

ですから、浄土に帰る人生というのは、この「おかげさま」という事実を目覚めた人生を歩むということなのです。そして、それが、人間に生まれた本当の目的です。

この阿弥陀さまのメッセージ（南無阿弥陀仏）一つ分かれば「これで満足！これさえあれば何も要らない！」という「いのち」の欲求が満たされた人生の旅が開かれるのです。

まさに、阿弥陀さまは人間に生まれた本当の喜びを、如何にしたら深く味わうことが出来るかを教えて下さるお方です。

「我が人生の旅に帰るところを持つ」・・・このことの大切さを、今一度噛みしめたいものです。

平成15年2月 「光明寺だより26号」より